



イタリア語における冠詞研究



写真・古浦敏生
(文学部教授)

本書は、同じ表題の筆者の学位論文を若干修正した後、外国語による引用文や資料の一部を削除し、簡潔にまとめたものである。

イタリア語の冠詞に関する研究は、わが国はもとより欧米においても未だその蓄積に乏しい。本書は、イタリア語の特殊な意味領域における冠詞の研究を基礎として、共時的・通時的視点から改めてイタリア語の冠詞の総合的研究を意図し、冠詞の用法全体を統括する基本的要因の析出を試みたものである。序論、本論、各論、結論から構成され、これに参考文献、各種索引が添付されている。

たかが冠詞、されど…

冠詞は実に厄介な代物である。例えば、喫茶店にやってきた客が不定冠詞をつけてコーヒーを注文したとする。この客はカップブチーノや紅茶のような他の飲物を注文する可能性もあったのであるが、この時はたまたまコーヒーを注文したのである。同じ場面でコーヒーに定冠詞をつけて注文する客もいる。この客はいわゆる常連客であって、バーテンの方もその客がいつも何を注文するかがよく分かっているのである。来客にコーヒーを勧める場合、

午前十時頃、即ち、典型的なコーヒータイムの時間帯であれば、客の方もコーヒーが出てくることを期待している。定冠詞をつけて「コーヒーはいかがですか」と尋ねるのが自然である。しかし、午後七時頃、すなわち、食前酒の時間帯であれば、コーヒーのサービスは予期しないことであり、この場合は、不定冠詞付きのコーヒーがふさわしい。

島名と定冠詞

イタリア語では、定冠詞のつく島と無冠詞のまま用いられる島とが区別されている。

コルシカ島、サルデーニャ島、シチリア島、ボルネオ島は定冠詞とともに、キプロス島、クレタ島、スマトラ島、マルタ島は無冠詞で現れる。イタリア人学者によれば「大きな島には定冠詞をつけ、小さな島は無冠詞で用いる」とされている。

筆者の調査によれば、確かに、そういった面もないわけではないが、イタリア人は、面積的には小さくても、自国の島にはひいきめに定冠詞をつけていることが分かった。例えば、インドネシア領のジャワ島(十二万二千平方*)は無冠詞であるのに、イタリア領の

エルバ島(三〇平方*)には定冠詞をつける。また、いったん無冠詞の島であるとの烙印を押されると、容易には定冠詞の島に昇格できないことも明白になった。

作家名と定冠詞

イタリア人文法家によると「人名の姓は通常無冠詞で使用されるが、有名人には定冠詞がつけられる」とされている。例えば、ボツカッチョ、ペトラルカには定冠詞が付され、パリーニ、フォスコロは無冠詞で現れる。しかし、作家の有名度はどのようにして測定されるのであろうか。

そこで、刊行年代の異なる二種類の「イタリア文学史」を資料として調査を進めた結果、「文学史上に名を残した「古い作家」には定冠詞を付し、未だ評価が確定していない「現代作家」は無冠詞とする。そして、「古い作家」と「現代作家」とを区別する新旧の分岐点は、ルネサンスの終焉期(二六五〇年頃)やイタリアの独立(二八六一年)と一致している。従って、こういった文化的・政治的大変革と連動して定冠詞の使い方も変化する」という事実が判明した。

筆者の自己点検評価

「ガクタン」という術語がある。これは「学術単著」の略語であって、われわれ大学入にのみ通用する社会方言である。本書はまさにこのガクタンであって、売れない本の代名詞みたいなものである。世界一級の観光地を有するイタリアは、ヨーロッパツアーには欠かせない。昨今は、旅行用のイタリア語会話の本、初歩のイタリア語文法書、基本単語集が多数出版されている。しかし、本格的なイタリア語研究書となると、わが国では皆無に等しい。その点、本書も多少は意義があるのかなと自負している。ご指導くださった広島大学名誉教授、吉川守先生に衷心より感謝申し上げます。

(A5判 二二〇頁) 三五〇〇円

精文流 平成八年二月

プロフィール

(こくら・としお)

- ◇昭和十四年 広島市生まれ
- ◇昭和四十年 広島大学大学院文学研究科博士課程中退
- ◇平成七年 博士(文学)(広島大学)
- ◇所属 文学部言語学講座
- ◇専門分野 II イタリア語を中心とするロマンズ言語学